せいじんむけ
18さいみまんおことわり
涼宮ハルヒの睦言Ⅲ
VENOM Presrnts.
すずみやはるひのむつごとⅢ

涼宮ハルヒの陸言Ⅲ
VENOM Presents.
作:Rusty Soul
画:或十 せれか

涼宮ハルヒの睦言Ⅲ
すずみやはるひのむつごとⅢ
ある晴れた日の午後。
眠気を誘うようなポカポカ陽気の下。
幸か不幸か、昼休み開けの我がクラスの授業は体育。
200m走を男子顔負けのブッチ切りタイムで走り終えたハルヒが「ちょっと…」と手招きするので近寄ってみれば、そのままグラウンド端の木陰へと誘い込まれてしまった。
「ば、バカッ！こんな所で…」
俺が慌てて止める暇もなく、体操服の裾をスルスルッと捲りあげるハルヒ。
「大丈夫よ、誰も気付いてないわ。そんなことよりキョン、触って…」
目と鼻の先ではクラスメート達が真面目に授業に参加してる、その僅かな物陰で。
ハルヒが甘い声でも漏らそうものなら一瞬で俺たちが性戯に耽っているのがバレてしまいそうな距離で。
俺の腕はハルヒの胸元に滑り込まされていた。
しっとりと汗ばんだハルヒの乳房の感触が掌から伝わってくる。
「どう？」
「や…柔らかい」
「キモチイイでしょう？」
勝ち誇ったようにハルヒが微笑む。
VENOM Presents, Rusty Soul & 或十せねか

「ね…♡匂いかいでもいいよ？」
「え？」
普段はよほど近くにいても気にならないのだが、汗ばんで蒸れたハルヒの身体からは、男を昂らせる蠱惑的な香りが漂ってきている気がする。
その香りを逃すまいと、思わず何度も鼻をヒク付かせていたのがハルヒにはバレバレだったのか。
ハルヒに頭を抱きかかえられるような格好になりながら胸元へと顔を埋めると、シャンプーの残り香のような甘酸っぱい香りが一段と強くなった。

「キョン…。私の汗の匂い、そんなに好き？」
どことなく嬉しそうなハルヒが、グイグイと身体を押し付けてくるものだから、あっという間に汗が移り、俺の顔面はじっとりと湿り気を帯びてくる。
上唇の辺りにムギュッと乳房を擦りつけられた瞬間には、両の鼻孔からステレオのような衝撃でハルヒ臭が飛び込んできた。

『あんたばっか楽しんでるなんて反則よ。
私のコトも気持ちよくしなさい、キョン！』
そう言うとフェンスの土台に腰を下ろし、
おもむろに股を拡げてくるハルヒ。
「わ、わかったよ…」
元は、と言えばハルヒが誘ってきたことなの
だから、俺が多少楽しんだ所で咎められる
云われはない気もするのだが…。

ともかく、ハルヒがこのポーズを取った以上
何を求めているかは一目瞭然。
『このままでいいか？』
『ぬ、脱ぐのはまずいわよ。
いいから…、早く…しなさい』
さすがにブルマを脱ぐのは躊躇するハルヒ。

仕方なく、俺は布地の上から、ハルヒの
割れ目辺り目がけて舌を突き立てた。
すぐさま、ジュッという音と共に愛液が
にじみ出してくる。
遅れてハルヒの性突起がプクッと頭を
もたげ、ブルマの上からでもその形が
クッキリと見て取れるほどに勃起して
きた。

『ふっ…！』
堪えきれずに思わず洩らしたのか。
ハルヒの口から妙な悲鳴が聞こえた。
『クラスのヤツらにバレるぞ？』
『わ、わかってる…わよっ！
気にしないで…続けなさいよ。
キモチイイんだから…』

「ねぇキョン…、したいんでしょ？」
「……」
いや、さすがにそれはマズイだろ。イロイロと。
「しちゃおっか…？」
「……」
耳元で囁く小悪魔の誘惑が振り払えない。
「ね…♥
私のアソコにこれ挿れて、グチョグチョってしたくない？」
股間を舐めて愛撫してあげたお礼とばかりに、今度は
ハルヒが俺の肉棒を頬張る。
真っ昼間から屋外で、しかもいつクラスメート達に見つかる
かもしれない状況で、ハルヒの口がモゴモゴと蠢くたびに
快感が俺の背筋を駆け抜けていく。
「イキそうなの？ 飲んであげようか？」
さ、さすがにこんな状況でイケるハズが…
あ、でも…
このままハルヒの舌技で責められ続けたら…
うっ、やばっ！
「射精したいなら、膣内以外は不許可よ」
唾液の雫を飛散させながら、慌てて口から肉棒を引き
抜くハルヒ。
寸止め成功、してやったり。
ニコッと微笑む小悪魔ハルヒの顔にはそう書いてあった。

ヌチョッ!!
聞き覚えのある卑猥で湿った音と共に
俺の竿がハルヒの中に飲み込まれる。
グポッ!!
ハルヒが腰を浮かせるたびに、吸い付いたハルヒの膣壁が
俺のモノとの離別を拒むかのような音をたてる。
それほどまでにハルヒの膣の濡れ様は凄く、
膣壁の絡みつき具合もひとしおだ。

ブルマの股間部分を手でグッとたぐり
寄せ、自らの膣穴を快感で埋めていく
ハルヒと。
午後の日射しを受けキラキラと輝いて
いる、トロトロに潤んだ結合部に興奮を
隠せない俺。
お互い、声は殺しあうも、淫猥な水音と、
甘い鼻息の漏れる音は隠しようもなく、
その微かな物音が俺たち二人に、
「快感を伴う生殖行為をしている」
ことを自覚させる。

「外には…射精しないで…よう
服に着いたら…大変だから」
つまり、中出し依頼。

「今日は大丈夫なのか?」
「わかんない…わよう」
欲しがるわりに、そういうところは
ルーズなのだから堪ったもんじゃない。
「そうじゃなくて…、奥に掛けられる
瞬間が興奮するのよう!」
仕方ない、今日も俺ので興奮させて
やるしかないようだ。

「涼宮さん？ 涼宮さ～ん」
俺たちが行為を終えハァハァと荒い息を吐いていると
ハルヒを呼ぶ女生徒たちの声が耳に飛び込んできた。
「二回目のタイム測るわよ、何処に居るの～？」

「今行くわよ」
大慌てで結合を解くハルヒ。
そして何食わぬ顔でスタートラインにつく。

が、膣内に大量の精子を仕込まれた状態で、
クラウチングスタートの姿勢を取ったハルヒの
股間からは、白濁の精液がネットリと染み出し
今にも零れ落ちそうになっている。
眉をしかめているところを見るとハルヒ自身も
自らの股間から溢れ出す熱い感触に気付いて
いるようだ。
ゴールする頃にはブルマの内側は、溢れ出た
精液でベットリと汚れているに違いない。

結局ハルヒは、残りの授業をそのまま
ブルマの中をヌルヌルに湿らせた状態
で受け続けたのだった。

体育の授業から数時間後の放課後。
本日の俺のSOS団としての活動は、古泉との白熱したボードゲーム対決だったり。
そんな俺たちの対戦に興味を持ったのか、近寄ってきたハルヒが俺の傍らで盤面を覗き込んできた。

「どうやってやるの、このゲーム？」
「これはかくかくしかじか…」
「へぇ…。で、キョンが今勝ってるわけ？」
「ん～…どうだろうな」
「なるほど、涼宮さんはそちらの応援ですか？」
「別に。ちょっと興味があっただけよ」

と…
表向きはゲーム観戦を装っているハルヒだが、机の下、古泉の死角になっている所ではちょっと事情が違っていた。

「ハルヒ、まずいって…」
小声で俺が叱るも、クスッと笑うだけで取り合おうともしないハルヒ。
それどころか、最初はズボンの上から俺の股間部分を優しく撫で回していただけだったのが、『ジーッ』という音と共にチャックを下ろされハルヒの手がズボンの内側にまで侵入を開始する。

「固くなってるじゃない♡」
「ば、バカッ、こんな状況で…」
「こんな状況で触られたから固くなっちゃったって言うの？」
「……」
「キョンってば、変態～♡」
「お、お前だって…」

いつものことだが、止められなければハルヒの行為は
際限なくエスカレートしていく。
そして俺の声でハルヒが止まった試しはない。

ゴソゴソとトランクスをまさぐっていたかと思うと、
突然ズルッとペニスを引っ張り出しにかかるハルヒ。
慌てて抑え込もうにも空いた片手での応戦では力及ばず。
晒け出された肉棒は、そのままハルヒの手の中でシコシコと
しごき上げられ、極みへと弄ばれていく。

「まじ…か？ うわっ…」
あまりにも大胆なハルヒの行為に、思わず声が。
対面の吉泉が訝しげな表情を向けてくる所を
見るとまだバレてはいないのだろうが…。

「あっ、ごめん！」
突然、ハルヒの謝罪の声と共にゲームのコマが
机から転がり落ちた。
否、俺はハッキリと見た。
ハルヒが指先でそれ弾き落とす瞬間を。
何を考えていやがる？

「私が拾うわよ」
そう言ってハルヒがスッと身をかがめたのは
すべて計算し尽くされた演出だったのだろうか？
一瞬そんな疑問が頭を過ぎるも、深く考え込む
間もなく、机と俺の隙間に滑り込んできたハルヒ
によって、俺のペニスは咥え込まれていた。

ヌルッとした感触と共に、一気に口腔内に
引きずり込まれたのが判る。
続いて聞こえてくるチュパッという、何かを
吸い上げるような物音。
と同時に、一気に快感が下腹部を襲う。

「早くイかないと、みんなが不審に思うわよ」
机の下からそんな囁き声が聞こえてくる。

「涼宮さん？ まだ見つかりませんか？」
気になりだしたのか、古泉が机の下を覗こう
としている。今覗き込まれるとハルヒのパンツが
丸見えに…、じゃなくて、ハルヒが俺の竿に
しゃぶりついて濃厚なフェラチオをかましている
瞬間を目撃されてしまう！

「ほら早くっ！
イって、キョン♥
イキなさい！」

ちょっと焦りを含んだハルヒの声と
共に、ハルヒの顔の上下運動が激し
さを増した。

「こ、今度はちゃんと飲んであげるわよ!?
いい子だから出しなさい♡」
俺があまりに遅漏ないせいか、焦りが
募ってきたハルヒは精飲を約束してまで
俺を盛り上げようと必死だ。

もうやめてしまえばいいのにと思うの
だが、最後までやり遂げようとするのは
ハルヒの意地か、
はたまた俺を悦ばせたい健気さか。

結局はハルヒの舌技に
屈する感じで、俺は精を
彼女の口内へと解き放つ。

「貴方の番ですよ?」
机上では吉泉が手番を
急かすその影で、ハルヒの
舌に、歯茎に、喉奥に、
ビュルビュルと音を立てて
射精する俺。

ハルヒもまたゴクッゴクッ
と喉を打ち鳴らしながら
精液を飲み下している音が
聞こえてくる。

「ごちそうさま♪」
口元をハンカチで拭いながら
ようやくコマを拾い上げた
ハルヒが這いだしてきたのは
何分後だったろうか。

「そんなことより、聞きたいことがあったのよ」
古泉との対戦が終わるのを待ちかまえていたハルヒは、俺をパソコンの前まで引っ張ってきた。
「この動画をDVDに焼きたいんだけど…」
そう言いながら、画面を指さすハルヒ。
ふむ…それくらいのことならワケないが。

だが。
それ以前に問題は、だ！
この立ち位置からディスプレイを覗こうとすると、ハルヒの胸の谷間が丸見え…。
つ～か、頂点の突起までモロ見え。

「どうしたのよ？」
さすがに俺の挙動った視線に気付いたのか、ハルヒが自らの胸元に視線を落とす。

「何よ、キョン？
あれだけ出しておいて、まだやり足りなくてこんなトコ覗いてるの？
呆れた～」
おいおい…
どっちかつ～と、見せてきたのはハルヒお前の方じゃないのか？

暴れられてみたものの、
ハルヒの胸チラにしっかりと股間が反応
してしまっていては反論の余地がない。

「仕方ないから、抜いてあげるわよ。
ほら、チャック下ろしなさい」
パソコンの影でみんなからは死角になっている
ことを確認しつつ、ハルヒは俺の肉棒をズボン
から引っ張り出す。

「いい？ ここ使ってしてあげるから。
みんなに気付かれないように、私にDVDの
焼き方教えてる振りするんのよ」
そう言うとハルヒは自らの腋をスッと上げ、
そこにペニスを挟んでユルユルと肩を動かし
腋でしごき始めた。

この陽気のせいか、しっとりと汗ばんでいたハルヒの
腋の下は、時折、膣内に挿入したかのような錯覚を
起こさせ、ハルヒが肩に力を込めるたびに俺の肉棒に
強烈な刺激が走る。
いつしか俺はハルヒの肩を抱き、彼女の腋を嬲るかの
如く腰を擦りつけていた。

「ぐっ… ハルヒ……」
「あ、イキそう？ キョン？」
俺の微かな呻きと、肉棒の脈動感から察したのか、ハルヒがクイッとこちらに顔を向けた。
「このまま射精するとパソコンに掛かっちゃうし、手に出したら匂いでみんなにバレちゃうし、咥えるなんてもってのほかだし…」

「いいわ♡ ここに掛けなさい」
そう言ってハルヒが差し出したのは、今し方まで俺の肉棒をしごいていた腋の下。
制服の袖口をグイッと指で拡げ、服の中へ直接ハルヒの身体目がけて発射しろと言う。
二人の体温で温められたハルヒのフェロモン臭がフワッと立ち上って来ては射精感を煽る。

「か、掛けるぞ！」
「どうぞ♡」
ハルヒの声に後押されるように俺は彼女の腋の下のくぼみに、そしてハルヒお気に入りのライトブルーのブラジャーの編み上げ部に、本日三度目となる射精を敢行していた。

幸運にも、ハルヒに腋射した瞬間は誰にも見られることはなかった。

が。

だからといって、団員勢揃いの部室内で本番まで求めてくるハルヒの大胆さにはハッキリ言って脱帽である。

室内に、パソコン机に、椅子の背を向け窓側を向いたハルヒは下着をずらして挿入を求めてくる。

「ド、ドキドキして、いつもより感じちゃうわ！」

そう言って鼻を鳴らすハルヒの膣内に大量の射精。

「あふっ♥」

子宮の奥に熱い精子の一撃を受けて、とうとうハルヒの口から、部屋中に響くほどの悲鳴が漏れた。

涼宮ハルヒの睦言 III

すずみやはるひのむつごと III

Suzumiya Haruhi no Yutsu fan book vol.III

PRESENTED BY VENOM

RUSTY SOUL
ALTO SENEKA

2006-10-1 発行

http://www.venom-plus.com/

＊本誌を無断で複製・転載することを禁じます
＊本誌をスキャンした画像ファイルの複製・転載・配布・交換等の行為を禁じます
＊18歳未満の方の購読を禁じます

前回に引き続きコメントスペースは規模縮小でお送りしていますw
「涼宮ハルヒの睦言」第三弾、お気に召して頂けたでしょうか？
前作がSOS団の女の子総出演～とか欲張りすぎて、
作画的にも、シナリオ的にも、文章装飾的にも不完全燃焼すぎた気がするので。
今回は初心に返ってハルヒ×キョンのスタンダードなエピソードで纏めてみました。
あ～、シチュエーションは全然スタンダードじゃなかったですけどねw

とりあえず今作でハルヒネタは、描きたい物一通り描いてしまった気もするので
もし何か思い立ったネタがあれば、次回別シリーズにてお逢い致しませう～

3作総じて、拙い作品にお付き合い頂いた読者諸兄に
深く御礼申し上げます。

涼宮ハルヒの睦言Ⅲ

すずみやはるひのむつごとⅢ

VENOM Presrnts.